



# 筑紫女学園大学リポジット

## 1. Les villes dans le Voyage en Orient(7) : L'influence de Volney sur Nerval

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/693">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/693</a>

# 『東方紀行』における都市(7)

—ヴォルネーがネルヴァルに与えた影響—

間 瀬 玲 子

Les villes dans le *Voyage en Orient* (7)

—L'influence de Volney sur Nerval—

Reiko MASE

## I. 序

19世紀フランスの作家ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval (1808—1855) は、作家で哲学者ヴォルネー Volney (1757—1820, コンスタントン・フランソワ・シャッスブッフ伯爵 Constantin François de Chassebœuf) を作品中に登場させたり、彼の言葉を引用したりしている。筆者はすでにネルヴァルがラマルチーヌの『東方紀行』 *Voyage en Orient* からどのような影響を受けたかを論じた際、この問題に関連してヴォルネーについても論じたことがある。本論文では、ネルヴァルがヴォルネーからどのような影響を受けたかを論じてみたいと考えている。(1)

## II. ヴォルネーの経歴

ヴォルネーは序文ですでに言及したように、18世紀から19世紀にかけて活躍した作家で哲学者である。パリで法律と医学を修めた後に、東方旅行に出かけた。ヴォルネーの作品の編集をしたガストン＝マルタン Gaston-Martin によるとヴォルネーはアンジェで遺産を相続し、東方旅行を計画したと言われている。(2) ヴォルネー伝記研究者であるジャン・ゴルミエ Jean Gaulmier の著書によ

ると1782年秋に出発し、1783年1月にエジプトのアレキサンドリアに到着している。カイロには同年1月から9月26日まで滞在している。9月26日にカイロで船に乗り、同年9月終わり頃にダミエッタ（エジプト）に到着する。また同年12月から1784年1月半ばまでアレppo（シリア）に滞在する。次に2月にトリポリ（レバノン）、3月から10月までマル＝ハンナに滞在する。11月にはエルサレム、1785年1月はガザ、2月から3月までヤフォに滞在する。マルセイユに戻ったのは4月の半ばである。(3) このようにヴォルネーの東方旅行は足かけ4年もかけた大旅行であった。旅行後に『エジプトとシリア旅行記』 *Voyage en Syrie et en Égypte* (1787) を発表した。この著作について、すでに言及したゴルミエは次のように評価している。

Mais ce ne sont pas seulement les voyageurs et les militaires qui tirent profit de ce beau livre. Il serait intéressant de mesurer l'influence qu'il a exercée sur la pensée des historiens et sur l'imagination des poètes dans la première moitié du XIX<sup>e</sup> siècle. Ce tableau véridique de l'Orient a largement contribué, en mettant en lumière les ressorts politiques et les mœurs de l'Égypte et de la Syrie, à rénover la conception générale que l'Europe pouvait se faire de l'antiquité méditerranéenne. (4)

しかしこの美しい本（ヴォルネーの『エジプトとシリア旅行記』）から利益を得たのは単に旅行者と軍人だけではない。19世紀前半の歴史家の思想と詩人の想像力に与えた影響を評価することは興味深いことであろう。この正確な東方の一覧表は、エジプトとシリアの政治的権限と風俗を明らかにして、ヨーロッパが古代地中海から抱いていた一般的概念を一新することに広く貢献した。

ヴォルネー研究の第一人者とも言うべきゴルミエは『エジプトとシリア旅行記』に対して極めて高い評価を下している。これに対してエドワード・W・サイー

ド Edward W. Said はヴォルネーのこの作品に対してナポレオンへの影響という観点からかなり詳しく論じているが、ゴルミエとは全く違う見方を提示している。

Volney evidently saw himself as a scientist, whose job it was always to record the “état” of something he saw. The climax of the *Voyage* occurs in the second volume, an account of Islam as a religion. [...] Volney’s work constituted a handbook for attenuating the human shock a European might feel as he directly experienced the Orient… (5)

ヴォルネーは明らかに、自分の見た事物の「状態」を常に記録する科学者であることを自認していた。『旅行記』のクライマックスは第二巻の宗教としてのイスラムの叙述のなかに現れる。(中略)ヴォルネーの著作は、ヨーロッパ人が直接にオリエントを経験する時感じるかもしれない、人間的衝撃を和らげるための手引書であった。

サイドはヴォルネーの著書をヨーロッパ人がオリエントをねじふせるための手引き書という評価を下している。この評価が正しいかどうかは判断しがたいものがある。しかしヴォルネーが科学者のごとく事物を記録しようとしたというのは事実であり、『エジプトとシリア旅行記』にヴォルネー自身の個人的感想が極端に少ないというのも否定できない事実である。

その後ヴォルネーは三部会第三身分代議員を務めるかたわら、1791年に有名な『廃墟論』*Les ruines, ou méditations sur les révolutions des empires* (1791) を発表した。ネルヴァルに影響を与えたのは上記の二つの著書とされている。ヴォルネーのその後の学問上の活躍はネルヴァルの作品で言及された形跡がない。

### III. ネルヴァルの作品中に描かれたヴォルネー

ネルヴァルがその作品中でヴォルネーについて言及している箇所は多いわけではない。すでに言及したゴルミエはこの点について次のように述べている。

Gérard de Nerval fait mainte allusion à Volney dans son propre *Voyage en Orient* et le personnage de Volney obsède si fortement son imagination qu'il en fait l'un des héros de son roman inachevé, *Le Marquis de Fayolle* [...]. (6)

ジェラルド・ド・ネルヴァルはヴォルネーについて、彼の『東方紀行』の中で幾度となく触れる。そしてヴォルネーという人物があまりに彼の想像力から離れないので、彼の未完の小説『ファイヨール侯爵』の主人公のひとりにした。

ゴルミエの指摘のようにネルヴァルがヴォルネーの人となりをもっと詳しく書いているのは、『ファイヨール侯爵』*Le Marquis de Fayolle*である。この作品は『ル・タン』紙 *Le temps* 1849年3月1日号から同年5月16日号まで掲載されたが、未完に終わった。この作品でネルヴァルはヴォルネーの顔つきを次のように表現している。なおネルヴァルがヴォルネーと面識があったという記録はない。

À coté de lui, un jeune homme pâle et fleut, au front large et lourd de pensées, avec de petits yeux à demi fermés, un nez recourbé sur une petite bouche aux lèvres, minces, —Chassebœuf— qui plus tard ne garda que le nom de Volney. (7)

その隣は青白い顔をしてほっそりとしている青年で思索の詰まった広い額の下に半ば閉じられた目があり、唇の小さな口の上に鷲鼻がのっている。これはシャッスブッフとって、後にヴォルネーとのみ名乗る人物であった。

プレイヤッド版において『ファイヨール侯爵』の校訂を担当したジャック・ボニー Jacques Bony はこの一節について次のような注を書いている。

Petite erreur de Nerval : Constantin-François Chassebœuf de Boisgirais se fait d'abord appeler Boisgirais avant d'adopter le pseudonyme de Volney (*Voltaire*+*Ferney*?) au moment de son voyage en Orient, entre 1780 et 1785. Le portrait qui figure dans l'édition Lebigre des *Ruines* ne ressemble guère à celui que trace Gérard, pas plus que la reproduction du buste de David qui figure dans l'édition Bossange, dont Gérard utilisera plus loin la Notice. (8)

ネルヴァルの小さな間違い：コンスタント＝フランソワ・シャッスブッフ・ド・ボワジレは1780年から1785年の東方旅行の時にヴォルネー（ヴォルテールのヴォルとフェルネーのネーをくっつけた）というペンネームを採用する前にまずボワジレと呼ばれていた。『廃墟論』のルビグル社版に掲載されている肖像画とジェラルムが描くそれとは全く似ていないし、ジェラルムが後に注を使うボッサンジュ版に掲載されているダヴィッドの胸像の複製とも同様に似ていない。

ヴォルネーは『19世紀ラールス大事典』*Grand dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle* では Volney (Constantin François de Chassebœuf, comte de) と表記されている。(9) 一言でいうと、彼の名前は数度の変遷を経て、最終的にヴォルネーと称するようになったと言えるであろう。それよりも重大なのは、世に伝えられる肖像画及び胸像とネルヴァルが描いたヴォルネー像の違いである。先

にも述べたようにネルヴァルとヴォルネーが実際に対面したという記録はない。『ファイヨール侯爵』に描かれたヴォルネーは、ネルヴァルの想像力を加味して描いた人物のようである。それではネルヴァルはヴォルネーのどんな面に興味を持ったのであろうか。『ファイヨール侯爵』の次の一節を引用してみよう。

C'est un homme qui a voyagé et qui a risqué sa vie plus souvent que nous tous. Il est allé puiser la sagesse en Orient, il a vécu quatre ans parmi les Égyptiens et les Druses, il est bon à écouter pour des jeunes gens comme nous. (10)

彼は旅行をし、私たち皆よりも頻繁に命の危険をさらした。オリエントには叡智を汲みに行ったし、エジプト人やドルーズ族の間で4年間も生活した。私たちのような若いものにとって彼の話を聞くことはためになる。

ネルヴァルが『ファイヨール侯爵』を執筆したのは、彼の東方旅行の後である。それでもこのような記述をするのは、4年間という時間の長さとその滞在の質のせいであろう。東方旅行の魅力と同時にその危険性をも熟知しているネルヴァルだからこそ、ヴォルネーの東方滞在を素直に賞賛したのであろう。しかもネルヴァルが『東方紀行』を執筆する際に、ヴォルネーの諸作品を参考にしたこともあり、敬意を表している。

またヴォルネーに関する次のような珍しいエピソードも紹介している。

《Et tu viens de recevoir, dit Moreau rasseyant, une belle médaille d'or de l'impératrice Catherine, pour ton voyage en Syrie … (11)

「君はシリア旅行のおかげでロシアの女帝エカテリーナから見事な金メダルをもらったばかりだね。」とモローが座り直して言った。

文中のモローは後に将軍になった人物である。プレイヤッド版の编者であるジャック・ボニーの注を参考にすると、ロシアの女帝エカテリーナ二世は、『エジプトとシリア旅行記』と同様、ロシアに好意的な著書『トルコ人の現在の戦争に関する考察』*Les Considération sur la guerre actuelle des Turcs* (1788) に対してヴォルネーにメダルを授与した。しかしロシアがフランス大革命に反対したので、1791年にメダルを返還している。(12)

以上のようにネルヴァルはヴォルネーの顔かたち、東方旅行、果てはロシアからもらった金メダルのことまで言及している。『ファイヨール侯爵』はブルターニュ地方を舞台にした虚構の作品である。そこに実在の人物を登場させて、現実感を加味する手法は珍しいものではないかもしれないが、読者に作品との距離を感じさせない役割を果たしている。ネルヴァルはヴォルネーを足かけ4年に渡る東方旅行を経験し、若くしてオリエントの叡智を吸収した人物として描いている。19世紀の作家であるネルヴァルはもちろん軍人ではない。すでに言及した20世紀の研究者であるサイドがヴォルネーの著作をナポレオンへの影響という観点から分析したが故に、彼の著作を「オリエントをねじふせるための手引き書」という評価を下したことを再度指摘することにしよう。ネルヴァルはヴォルネーの著作をサイドの観点とは全く異なる観点から読み取っている。それは素直に東方旅行を記録した書として読んでいるし、またヴォルネーという人物も叡智を獲得した人物として描いている。

#### IV. ヴォルネーがネルヴァルに影響を与えた点

それではヴォルネーがネルヴァルに影響を与えた点を具体的な記述に基づいて論じてみたいと考える。まず第一にエジプトのピラミッドに注目してみよう。ネルヴァルの『東方紀行』*Voyage en Orient* において、話者「私」は総領事に誘われて、カイロのローダ島に遠足に行くことになった。(13) この島は19世紀半ば頃は魅力的な別荘地であり、カイロの植物園ともいうべき場所であった。その島から三つのピラミッドがはっきりと見えたと書かれている。「私」は遠足



に同行した人との間で「ピラミッドとは何か」という議論を行なった。ネルヴァルは次のように書いている。

D'ailleurs, n'est-il pas plus absurde, comme l'a remarqué Volney, de supposer qu'on ait entassé tant de pierres pour y loger un cadavre de cinq pieds ? (14)

それにヴォルネーが指摘したように、身の丈五尺の遺骸を安置するために、このように多くの石を積んだと考えるほうが馬鹿げてはいないだろうか？

ピラミッドが何のために建立されたのかは、古来から議論の的とされてきた。この問題についてヴォルネーはどのように述べているのかを実際に探してみると、『エジプトとシリア旅行記』の中で次のように述べている。

Il faut donc revenir à l'opinion, toute vieille qu'elle peut être, que les pyramides sont des tombeaux … (15)

どんなに古びた意見であったとしても、ピラミッドは墓であるという意見に戻らなくてはならない。

プレイヤッド版の編者であるクロード・ピショワ Claude Pichois とジャン・ギヨーム Jean Guillaume は、ネルヴァルがピラミッドに関してヴォルネーの意見を改変したという見解を示している。

Nerval transforme la pensée de Volney. […] il est 《persuadé que les pyramides ne sont que des tombeaux》. (16)

ネルヴァルはヴォルネーの考えを改変している。(中略) 彼は「ピラミッド

は墓でしかないことを確信している」。

しかし実際ヴォルネーの『エジプトとシリア旅行記』を注意深く読んでみると、ヴォルネーはピラミッドに関して明確でない書き方をしている。そのせいでネルヴァルは誤解したのではないかと推論する。たとえば次の一文だけを読むとヴォルネーの真意がよくわからなくなる。

Pareillement quelques écrivains se sont lassés de l'opinion que les pyramides étaient des tombeaux, et ils en voulu faire des temples ou des observatoires … (17)

同じように何人かの作家はピラミッドが墓であるとの意見に飽き飽きしている。そして彼らはそれを神殿か天文台にしたがった。

ヴォルネーはすでに述べたように、最終的には「ピラミッドは墓である」との考えに行き着いている。その思考の過程をよく理解しなかったが故に、ネルヴァルは多少間違った引用をしてしまったのかもしれない。

次にネルヴァルがヴォルネーから影響を受けた点は、レバノンのバルベックについてである。ネルヴァルはこの地について次のような記述を『東方紀行』に残している。

… nous sommes arrivés à Balbek, dans l'Anti-Liban. J'ai rêvé quelques heures au milieu de ces magnifiques ruines, qu'on ne peut plus dépeindre après Volney et Lamartine. (18)

私たちはアンチ＝レバノンのバルベックに到着した。私はこの壮大な廃墟のまっただなかで何時間も夢想した。ヴォルネーやラマルチャーヌの後では描写することもできないであろう。

プレイヤッド版の編者によると、ネルヴァルは実際にはバールベックに行っていないので、描写できないと書いている。(19) これは疫病の流行のせいであると言われている。このネルヴァルに影響を与えたとされるヴォルネーの描写を引用してみよう。

*Balbek, célèbre chez les Grecs et les Latins, sous le nom d'Hélios-polis, ou ville du soleil, est située au pied de l'Antiliban, précisément à la dernière ondulation de la montagne dans la plaine. (20)*

ギリシャ人やローマ人において、「ヘリオポリス」の名前でまたは「太陽の町」で有名なバールベックは、アンチレバノンのふもとに位置しており、正確には平原の山の最後の起伏に位置している。

レバノン東部にはレバノン山脈とアンチ・レバノン山脈の二つの山脈がある。その間にベカー高原がある。この高原のほぼ中央にバールベックと言われる荘厳な神殿が存在する。豊穡の神バールに由来し、かつてはヘリオポリスと呼ばれていた。ジュピター、バッカス、ビーナスに捧げられた三つの神殿から成っている。すでにこの論文で言及したヴォルネーの研究者であるゴルミエによると「ヴォルネーは1784年8月にバールベックに行った」ことになっている。(21) ネルヴァルと違い、自分の目で見たヴォルネーの描写は、廃墟の壁の高さに至るまで詳細を極めている。

ネルヴァルは止むに止まれぬ理由でバールベック旅行を諦めざるをえなかった。そこであたかもバールベックを訪問した振りをして、読者にはヴォルネーの『エジプトとシリア旅行記』の記述を読むように勧めたのであった。ネルヴァルの『東方紀行』は旅のルポルタージュではなく、かなり虚構の入り混じった旅行記であることはつとに有名であるが、ことレバノンに関しては突発的な事件などの故に虚構の部分が多いのは事実である。

最後に指摘する点はシリアのパルミラである。レバノンのバールベックと同

様東地中海を代表する遺跡のひとつである。シリアのタドムル砂漠の中のオアシスに存在する。ネルヴァルはこの遺跡に関して『イシス』*Isis* において次のように述べている。

—Je songeais à ce magnifique préambule des *Ruines* de Volney, qui fait apparaître le Génie du passé sur les ruines de Palmyre, et qui n'emprunte à des inspirations si hautes que la puissance de détruire pièce à tout l'ensemble des traditions religieuses du genre humain ! (22)

私はヴォルネーの『廃墟論』のあの壮麗な序文に思いをはせた。パルミラの廃墟の上に過去の精を出現させたヴォルネーは、このように高い啓示から人類の宗教的伝統の全体をひとつひとつ破壊する力のみを得るのである！

『イシス』の話者「私」はポンペイのイシス神殿を見学した時、すべてを否定した大革命とキリスト教を取り戻そうとする社会的反動との間でただよう懐疑の世紀に育った自分に思いをはせ、ついにヴォルネーがパルミラの廃墟について書いた文章を思い出したのだ。この部分では、エジプトのピラミッドやレバノンのバールベックの場合と違い、ヴォルネーの哲学的な思想の影響を受けたと言ってもよいのではないだろうか。

またネルヴァルは『クイントゥス・オークレール』*Quintus Aucler* においてもヴォルネーに言及している。

Il y a, certes, quelque chose de plus effrayant dans l'histoire que la chute des empires, c'est la mort des religions. Volney, lui-même, éprouvait ce sentiment en visitant les ruines des édifices autrefois sacrés. (23)

確かに歴史の中には数々の帝国の没落よりも、もっと恐ろしいことがある。それは宗教の死である。ヴォルネー自身ですら、かつて神殿であった建物の

廃墟を訪れて、この感情を味わったのだ。

この一節は『イシス』のそれよりもより明確にネルヴァルがヴォルネーからどのような点で影響を受けたかがよくわかる。それは「宗教の死」である。ネルヴァルは廃墟を考える時、宗教がたどった歴史とその死を思い、ヴォルネーの『廃墟論』にたどり着くのだった。ヴォルネーの作品の中のパルミラに関する一節を読んでみよう。

…j’aperçus dans la plaine la scène de ruines la plus étonnante … (24)

私は平原に最も驚くべき廃墟の姿を見つけた…

ヴォルネーの『廃墟論』においてパルミラの廃墟に関する記述を読んでも、引用のように意外と思えるほどあっさりしている。ヴォルネーの研究者であるゴルミエによると、ヴォルネーがパルミラの廃墟に行ったという記録はない。(25) 確かなことはわからないが、ヴォルネーは想像でパルミラの廃墟について書いた可能性がある。その『廃墟論』をネルヴァルが読んで、ヴォルネーの宗教に関する考え方を汲み入れたのだ。ここではパルミラの廃墟を訪れたかどうかは問題ではなく、その「宗教の死」に関する考え方が大事であると言えよう。18世紀の思想を受け継ぎ、19世紀の思想をも学んだネルヴァルにとって、実際の廃墟の描写よりも、ヴォルネーが廃墟から思いをはせた宗教の歴史こそ一番の関心事であったのであろう。

## V. ヴォルネーとラマルチーヌ

すでに述べたようにネルヴァルはバールベックを描写する時に、ヴォルネーとラマルチーヌを列挙している。ネルヴァルの想像力の中ではこの二人の作家がごく近いところに存在することは疑いのない事実であろう。

この三人の作家の著作を整理してみよう。ヴォルネーが『エジプトとシリア旅行記』を発表したのは1787年ある。ラマルチーヌが『東方紀行』を発表したのは1835年のことであり、そしてネルヴァルが『東方紀行』増補改訂版第三版を出版したのは、1851年のことである。ネルヴァルはヴォルネーの著作から直接影響を受けたことは本論文ですでに述べたが、ラマルチーヌの著作を通してヴォルネーの思想に触れた点もあると考えられる。ラマルチーヌの『東方紀行』においてヴォルネーが言及されている箇所は限られているが、レバノンのマロン派信徒に関する次の記述を引用してみよう。

Volney, qui a vécu quelques mois parmi eux, a recueilli les meilleurs renseignements sur leur origine … (26)

彼ら [マロン派信徒] の間で数ヶ月を過ごしたヴォルネーは、その起源についての情報を集めた…

ネルヴァルは『ファイヨール侯爵』にヴォルネーを登場させ、中近東に長く暮らした人物として紹介している。また同じく『東方紀行』では「ドルーズ族とマロン族」Druses et Maronites という章までたてている。この点からもラマルチーヌの『東方紀行』のヴォルネーに関する記述を通して、ヴォルネーの生き方を再確認したのではないかと推論される。しかしすでに述べたように、ラマルチーヌがヴォルネーについて直接言及した箇所はそれほど多くはない。その大半はネルヴァルの『東方紀行』に描かれていないような類の言及である。このことからネルヴァルは、ラマルチーヌの『東方紀行』を通してヴォルネーを知ったかもしれないが、ヴォルネーの『エジプトとシリア旅行記』及び『廢墟論』からその思想を直接学び、大きな影響を受けたと考えるほうが自然であろう。

## VI. 結びに代えて

以上のように18世紀に活躍したヴォルネーはネルヴァルの諸作品に大きな影響を与えている。本論文ではまずネルヴァルの作品中にヴォルネーという人物がどのように描かれているかを検証した。実物の風貌とかなり違うとも言われているが、その経歴・人となりを作品中によく描いていると言えよう。次にネルヴァルの作品とヴォルネーの作品を比較し、具体的に検証した。その結果「エジプトのピラミッド」「レバノンのバールベック」「シリアのパルミラ」の三点に関する影響関係を指摘することができた。その結果言えることはネルヴァルは過去の遺跡を考察する際にヴォルネーの思想を参考にしたということである。そしてそれは単に建築物の考察にとどまらず、18世紀から19世紀への宗教に関する考察にまで及ぶことも理解できた。最後にネルヴァルはヴォルネーから直接影響を受けただけでなく、ラマルチーヌの『東方紀行』において描かれたヴォルネーに関する記述を通してヴォルネーを理解したという点も指摘した。ただしヴォルネーの著作から直接受けた影響を上回るものではないと考える。

18世紀から19世紀に活躍したヴォルネーは、ネルヴァルの『東方紀行』に影響を与えたと以前から言われてきた。しかしヴォルネーのテキストそのものが入手困難であったが故にあまり影響関係が明確でなかった。近年全集が出版されてその全貌が明らかになり、その影響関係を明確にできたと思われる。

### 注

(1) 間瀬玲子「『東方紀行』における都市(3)―ラマルチーヌの影響―」『筑紫女学園短期大学紀要』32号(1997.1), pp.1-20.

間瀬玲子「『東方紀行』における都市(4)―ラマルチーヌの『東方紀行』―」『筑紫女学園短期大学紀要』33号(1998.1), pp.1-19.

(2) 《C'est sans doute un peu plus tard que Volney revinedra à Angers recueillir un héritage de 6000 livres. Il se résout à employer cette somme, à ce qu'il

semble inattendue, à entreprendre un grand voyage en Orient. Il le prépare avec soin.》(Constantin-François Volney, *La loi naturelle ou catéchisme du citoyen français*, édition complète et critique (Textes de 1793 et de 1826) par Gaston-Martin, Paris, Librairie Armand Colin, M. CM. XXXIV, p.11. 訳：ヴォルネーがアンジェで6000リーヴルの遺産を受けに戻ってきたのは恐らく少しあとのことである。予想外のことであると思うがこの総額を使って、東方への大旅行を企てることを決めた。彼は注意深くその準備をする。)

- (3) Jean Gaulmier, *L'idéologue Volney 1757-1820, Contribution à l'Histoire de l'Orientalisme en France*, Genève, Slatkine Reprints, 1980 (Réimpression de l'édition de Beyrouth, 1951), pp.65-77. なお Jean Gaulmier, *Un grand témoin de la Révolution et de l'Empire, Volney*, Paris, Hachette, 1959 は前掲書の一部を収録した本である。
- (4) Volney, *Voyage en Égypte et en Syrie*, publié avec une introduction et des notes de Jean Gaulmier, Paris, Mouton & Co, 1959, p.16. ヴォルネーの書誌を作成したニコル・ハフィッド＝マルタンはこの校訂版を《Les précieuses notes de Jean Gaulmier font de cette édition critique la meilleure qui soit jusqu'à ce jour.》(Nicole Hafid-Martin, *Bibliographie des écrivains français, Volney*, Paris-Roma, Édition Memini, 1999, pp.34-35. 訳：ジャン・ゴルミエの貴重な注がこの校訂版を今日までの最良の本にしている。) と評価している。
- (5) Edward W. Said, *Orientalisme*, New York, Vintage Books, 1979, p.81. 日本語訳はエドワード・W・サイード著、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』東京、平凡社、1986、p.81-82を参考にして一部改変した。この本は文庫本の形でも出版されており、エドワード・W・サイード『オリエンタリズム 上』東京、平凡社(平凡社ライブラリー)、1993、pp.191-192が該当する。なおフランス語訳は Edward W. Saïd, *L'Orientalisme, l'Orient créé par l'Occident*, préface de Tzvetan Todorov, traduit de l'américain par Catherine Malamoud, Paris, Édition du Seuil, 1980, pp.99-100 が該当する。
- (6) Volney, *Voyage en Égypte et en Syrie*, 1959, p.17.
- (7) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Christine Bomboir, Jacques Bony, Michel Brix, Jean Céard, Lieven d'Hulst, Jean-Luc Steinmetz et Jean Ziegler et avec le concours de Pierre Enckell et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, p.1153. 以下この巻を *OECI* と略す。この作品を訳す際、『ネルヴァル全集 II 歴史への旅』東京、筑摩書房、1997年に収録された丸山義博訳『ファイヨール侯爵』を参考にした。
- (8) *OECI*, p.1911.



- (9) *Grand dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle*, tome 24, Nîmes, C. Lacour Editeur, 1991, p.1175.
- (10) *OECI*, p.1155.
- (11) *OECI*, p.1155.
- (12) *OECI*, p.1912 の記述による。
- (13) 観光ガイドブックによると「ゲジラよりも先に形成されたローダ島は、アラブ征服（7世紀）以来現在まで、全体像は変わっていない。つまり、海軍工場、ナイロメーター、要塞などの大きな建造物が建てられたのは、その時代以降のことなのである。アイユーブ朝最後のスルタンが、政務の拠点をここに移し、1240年に要塞、宮殿、兵営を建てた。マムルーク朝時代、特権階級が水辺に邸宅を構えたため、一帯は、美しい住宅街となった。この伝統は19世紀半ばまで続き、それ以後に建てられて、トルコ出身官僚の居住区域の中心となったサラムリク・モナスティルリヤ、マニアル宮殿などの現存する建物もある。」（『「旅する21世紀」ブック 望遠郷 14 エジプト』京都、同朋舎出版、1997年、p.283.）
- (14) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Max Milner et Jean Ziegler et avec le concours de Michel Brix et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1984, p.368. 以下この巻を *OECHII* と略す。ネルヴァルの『東方紀行』を訳す際、『ネルヴァル全集 III 東方の幻』東京、筑摩書房、1998年に収録された野崎歓・橋本綱 訳『東方紀行』とG・ド・ネルヴァル著、篠田知和基 訳『東方の旅—上』（世界幻想文学大系第31巻A）東京、国書刊行会、昭和59年と『東方の旅—下』（世界幻想文学大系第31巻B）東京、国書刊行会、昭和59年を参考にした。なお文中の *pied* は昔の単位で、0.324メートルに相当し、尺に近い。
- (15) Volney, *Œuvres*, tome troisième, *Voyage en Syrie et en Egypte*, textes réunis et revus par Anne Deneys-Tunney et Henry Deneys, Paris, Fayard, 1998, p.191. 以下この著書を *VOLNEY III* と略す。ヴォルネーは1787年に出版した時は *Voyage en Syrie et en Egypte* という題名で発表したか、1792年には *Voyage en Egypte et en Syrie* という題名に変えている（Nicole Hafid-Martin, *Bibliographie des écrivains français, Volney*, p.26 による）。本論文では『エジプトとシリア旅行記』という訳を使用している。
- (16) *OECHII*, p.1494.
- (17) *VOLNEY III*, p.189.
- (18) *OECHII*, p.598.
- (19) *OECHII*, p.1552 による。ジャック・ユレ Jacques Huré も彼の校訂版の中で次のような注をつけている。《Si Nerval avait vu ces ruines (entre autres celles du temple de Jupiter Héliopolitain), il ne fait pas de doute qu'il les aurait décrites,

même après Volney et Lamartine…》(Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, volume II, présentation et notes Jacques Huré, Paris, Imprimerie Nationale, 1997, p.433. 訳：もしネルヴァルがこれらの廃墟（とりわけヘリオポリスのジュピター神殿）を見ていたら、ヴォルネーとラマルチャーヌの後であってもそれらを描写したであろうに。)

(20) *VOLNEY III*, p.443.

(21) Jean Gaulmier, *L'Idéologue Volney 1757-1820*, p.75 による。

(22) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome III, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Michel Brix, Lieven D'Hulst, Vincenette Pichois, Jean-Luc Steinmetz, Jean Ziegler et le concours d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1993, p.619. この作品を訳す際、『ネルヴァル全集 V 土地の精霊』東京、筑摩書房、1997年に収録された中村真一郎・入沢康夫 訳『イシス』を参考にした。

(23) *OECH*, p.1135. この作品を訳す際、『ネルヴァル全集 IV 幻視と綺想』東京、筑摩書房、1999年に収録された入沢康夫 訳『幻視者』を参考にした。

(24) Volney, *Œuvres*, tome premier, textes réunis et revus par Anne et Henry Deneys, Paris, Fayard, [1989], p.172.

(25) Jean Gaulmier, *L'Idéologue Volney 1757-1820*, p.75 による。

(26) Alphonse de Lamartine, *Voyage en Orient*, texte établi, présenté et annoté par Sarga Moussa, Paris, Honoré Champion Éditeur, 2000, p.373.

付記 本論文は、平成12年度筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学特別研究助成金（一般研究助成）により遂行された研究の一部を公表したものである。